

# ハンズオンセミナー(HS)のご案内(要参加登録)

参加登録期間：4月21日(月) 12:00～5月24日(土) 23:59

## HS-01 こどもの損傷に出会ったらー損傷の基礎的知識と所見のとり方ー

◆8月30日(土) 9:15～11:45 [定員60名]

村瀬 壮彦(香川大学医学部 法医学)

日常的な診察場面において、ちょっとした切り傷から痣や熱傷など、乳・幼・小児の損傷に出会うことは稀ではないと思います。特に、多くの痣があったり、内ももや脇の下など普通はぶつけないところに痣があったりする状況では、「治療とは別の視点で写真撮影やカルテ記載をきちんと行おう」と考える先生が多いでしょう。しかし、いざ写真を撮影してカルテに記録を記入しようとしたとき、「あれ、この写真ってどこの傷を撮影したんだっけ?」、「うーん、この傷ってどんな風に表現すればいいだろうか…」といった気持ちになったことはないでしょうか。

本セミナーではこどもの損傷に出会った際、適切に記録がとれるよう、講義と実践の2つのパートを通じて学ぶことができます。まず講義パートでは基礎的な講義に加え、症例写真などを通じて損傷の基本やイメージを掴んでもらい、損傷の診かたや記載方法、写真の撮りかたについてもお話します。その後の実践パートでは、参加されるみなさんに写真撮影、記録など実際に行ってもらい、受傷機序や成傷器の推定を体験してもらいます。並行して活発な質疑応答や意見交換を行います。

なかなか学ぶ機会のない分野になりますので、医師の先生に限らず、興味のある方はぜひご参加ください。

## HS-02 ビジネススキルを医療現場に活用しましょう

◆8月31日(日) 8:30～11:00 [定員200名]

矢野 啓子(第一生命 マナーインストラクター)

診療所、クリニック等では、多くの人とのふれあいがあります。そのふれあいをより良いものとするため、患者さんに対する言葉遣いや電話対応のマナー、職場でのコミュニケーション等、それを専門としているマナーインストラクターの方をお招きし、実演を交えたハンズオンセミナーを行います。

どの職種の方にとっても、また仕事だけではなく日常生活においても役立つ内容となっています。ぜひご参加ください。

## 子どもたちへの理解を深める：アートメイキングで学ぶTIC（トラウマ・インフォームド・ケア）

8月31日（日）8:30～11:00 [定員40名]

森 香保里（四国こどもとおとなの医療センター 英国アートサイコセラピスト・ANZACアートセラピー協会認定スーパーバイザー）

言語化が未発達な子どもたちや、自分の状態をうまく説明できない子どもたち。そばにいますお母さんでさえ、不安な気持ちや状況をうまく伝えることが難しいことがあるのではないのでしょうか。

患児や親御さんのそのような非言語的な部分に気づくためには、まず支援者自身が自分の感覚に気づくことが第一歩です。子どもの行動の背後にある気持ちを理解するために、私たち自身の感情をどのように理解し、整理するかを共に体験していきましょう。このワークショップでは、正解のないアートメイキング（art making）を通じて、自身の「ネガティブ・ケイパビリティ」を振り返ります。また、自分の体験をもとに、他者の快感や不快感に対する反応に共感し、その思いを巡らせる力を養います。さらに、発達障害などの特性を持つ子どもへの理解を、体験を通じて感覚的に深めることができるのも、このワークショップの大きな特徴です。自分自身の傷や痛みを理解しつつ、相手も同様に傷ついている可能性があることを認識することが重要です。その上で、患児や他者の傷に触れる際、「問題行動」と見なされがちな行動の背後にあるものに気づきやすくなり、支援者としての意識を深めることができます。

「マインドフルネス」という言葉を聞いたことがありますか？アートメイキングは、作品を通じて行う「間接的な自己対話」です。自分の中で起こる変化に敏感になり、それを客観視し、時には言語化することが大切です。このプロセスは、まさに「今、この瞬間」に意識を向け、感覚的な理解を深める体験そのもの、それはマインドフルネスを実践することになります。

自分の中で起こる変化に気づき、それを客観視し、言語化できるようになることは、周りの人々の心の中を想像し、言語化する力（メンタライゼーション）を強化することにもつながります。そして、私たち支援者にも「トラウマ・インフォームド・ケア」が求められる時代に突入しています。このワークショップでは、トラウマへの「気づき」というものがどういうことかを体験することができます。

アートサイコセラピーのワークショップは、単に何かを描くことが目的ではありません。さまざまな画材を使い、その素材自体を体験し、探求することが主な目的です。実際の心理療法として行うアートサイコセラピーとは異なりますが、患者さんがセラピーの中で体験する一部を、ワークショップの参加者も体験することになります。ぜひ一度、その体験をしてみてください。

## HS-04 ホスピタルアート ～コミュニケーションを呼ぶもの作り～

◆8月31日（日）8:30～11:00 [定員16名]

森 合音（四国こどもとおとなの医療センター ホスピタルアートディレクター）

四国こどもとおとなの医療センターで10年間実施してきたホスピタルアートは、「痛み」のある場所にそっと手を当てるように生まれ、その場に関わる人々の創意工夫によって「痛み」を「希望」へと変質してきました。

これまでの「作家性」や「作品性」に注目されがちなアートの概念とは少し違った角度からアートそのものの力を問い直し、医療現場におけるアートの可能性を、患者さん、医療スタッフ、クリエイター、地域住民など様々な背景を持つ人々との対話を通じて模索し続けるものです。

当院ではホスピタルアートを「長期的な視点で取り組む問題解決」「全員参加型の病院づくり」と定義し、そのために・理念の顕在化・業務改善・社会包摂という三つの観点から、日常的に様々なアート活動を実施しています。

前半ではホスピタルアートのこれまでの経緯や実践について参加者の方々に情報共有し、後半では参加者と共に「全員参加型の環境づくり」を体験していただこうと思います。

その際に大切なのは①病院として伝えたいこと「自己表現」②患者さんが求めるもの「利他表現」③お互いに表現し合うこと「相互表現」のバランスをとりながら進めることです。

今回は外来という「場」においてどのような「痛み」が存在し、それをどのように受け止め、「希望」へと改善していくのかを対話しながら、外来に飾るモビールを制作していただきます。